

檜垣家集

4
3565



利中
3865



核垣といはれ女の多也
りて流あはよよと
なほ地ほあまなり
飽田郡白河のそま
何とていふみそは
府中まで婦肆など
るそ核垣がぬぐお
のそも居るそや
足くより核垣が墓
白河のそ九品山
蓮臺寺よりり
①清原元補
拾芥抄云清原元
輔下総守兼光男
深養父孫肥後守

核垣家集

①清原元補がまは舟中くくくくくくくく
い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
は〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
人たあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
あ元補の〜〜〜
い〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大正四年一月一日寄
富田文七氏贈

核

④大和
大和本紀云天照ノ
三角嶋崎アル故ニ
蹄ス角ノ隅ト同シ
和名類聚鈔云和銅
六年割日向國四郡
置大隅國拾玖鈔
云和銅元年割日向
四郡置之
○この後
大和本紀云薩摩手ト
往古隼人神通リ
シトキ彼國ヲ颯ト
ケサキテ過ケルニ
颯間ト号セシラ後
薩摩手ト改ム

何んぞこのくらゐにさうなれと
みたまひにさうなれと
のがごとしと
まえぬも命なれと
ねんかたもさうなれ
かゝるんをさうなれ
とそとをさうなれ

入

お月ごりり消息たもな男のなれ
目ごりりなれとさうなれ
とさうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ
とさうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ
さうなれとさうなれ

岑参が詩三憑君傳
語報平安

⑭ 犯ほち

たき今もかめを
らむあはれん

⑮ 肥後玉飽田郡

破のころりあり

捨遣集よけを

のせよとどかま

ほ元捕ひあも

まてゆりーと

あくらまはちか

まこよとらあ

アツリハレト

いぬの川の中あがありなま

⑪ 官休のまといわうてを宰府のま

官よて犯^⑫なひくあいかいふかになり

長谷^⑬といふまらまたづねまていあ

名あつてむかまといまはらえ

ていーていあむかまといまはらえ

とひあむかまといまはらえ

やあつちのま

ゆりけつとん

阿の捨遣集よ

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

あつちのま

の神職の者々又々
 之等は行せしもの
 友をともてはしめ
 捨た抄云太宰府
 宝亀二年十二月停
 筑前國隸太宰府
 延暦十六年九月
 日廢筑前又太宰
 府大同三年五月月
 置之

ち宰府を友
 友をともてはしめ
 捨た抄云太宰府
 宝亀二年十二月停
 筑前國隸太宰府
 延暦十六年九月
 日廢筑前又太宰
 府大同三年五月月
 置之

目紀ほのふ
 肥後國土記云肥後
 國者本肥前國合
 為二國昔崇神
 天皇之世益城郡
 朝來名峰有土蜘蛛
 名曰打獲頭獲
 二人率徒衆百八
 十餘人蔭於峰頭
 常逆皇命不肯
 降服天皇勅肥
 君等祖健緒組
 遣誅彼徒衆健
 緒組奉勅到來

小武のそ白きみ
 さふしあさだ
 他ほまたは孫
 けいひつさ
 野もがられ
 ちもあふか
 いくよう神の御
 後

皆悉誅夷便巡
 國裏兼察消息
 乃到八代郡白髮
 山月晚止宿其夜
 虛空有火自然而
 燎稍々降下著燒
 此山健緒組見之大
 懷驚怪行事既畢
 系上朝廷陳行狀
 奏言云云天皇下
 詔曰前拂賊徒無
 西眷海上之勲誰
 人比之又火從空
 下燒山亦怪火下之

あまのこがしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん

國可名火國

日本紀曰景行天皇
 五月壬辰朔從其北
 發船到火國於是日
 沒也夜冥不知著
 遙視火光天皇詔
 抄者曰直指火處因
 指火往之即得著岸
 天皇問其火光處曰
 何謂邑也國人對曰
 是八代縣豐村亦尋
 其火是誰人火也然
 不得至茲知非火
 故名其國曰火國
 釋日本紀載右全文
 土人奏言此是火國

又
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん
 けいそくしんそくしん

魚朝勝見奏申未
 解其名正似鱒魚
 耳歷御覽曰俗見
 多物即云介陪佐
 介今所献魚甚此
 多有可謂介倍魚
 今謂介倍魚其綠
 也
 又獻之平の後の
 所替なりおれり一言
 は此のいふ字を向
 やまりては誤と覺
 定ふの也誤と記し
 後亦と記すのいふ
 こと記せり誤り也
 是誤の後者誤也

花をさしきりかき
 心もぬらかせはゆけ
 又よもたもあつ
 うかきとせしめ
 きこもあつて消
 ちりしきりかき
 心もぬらかせは
 又よもたもあつ

出づるあまの
 とまふあまの
 みのり

①青椎の
 統おの糟を郡

青椎村はりの
 切曾名をまの
 前風土記云到
 國例先衆請干
 襲宮

②まのりまの
 まのりまの
 右家府は居合
 大武小武祭を
 むるをり職原

あまのりまの
 心もぬらかせは
 又よもたもあつ
 うかきとせしめ
 きこもあつて消
 ちりしきりかき
 心もぬらかせは
 又よもたもあつ

宮遷于松峽宮時飄
風忽起御笠隨風
故時人歸其所曰
御笠下

②この傳

筑前守阿那位
其の尚ある村の
名や

④ちぢんのこ

御笠郡は西府と

云ありを西府と

邪智府と云西の都

と云し和名類聚

云西府並國府在

御笠郡續日本紀

たましひをまゝに
いばるゝよき
かれとまゝに
おし居られ
まじりて
をそそか
こしと

云天平十五年十二月
始置筑紫鎮西府

①ちぢんのこ

のちぢんのこ

元補始ちぢんの

ちぢんのこ

よありて

ひこの

ひこの

をい

のも

ちぢ

②妻の

え補が

子家

②
此の
麻の
ちぢ
おし
まじ
をそ
こし

禁祕抄云帥大貳趣任^守上古必參内^中略延喜興範友于云
 大和物語は中々大貳純友討^討のよしよりい
 又樽垣がゆゑとあり中々大貳は小中好古より
 純友討のよしよりい中々好古は門軍純友より
 あり大系圖云

敏達天皇春日皇子妹子王^{大德}毛人^{小錦冠}毛野^{中務從三}

永見^{從五位陸奥外} 峯守^{參議} 篁^{參議} 葛繪^{從四位下} 好古^{大守大貳從三}
 征夷副將軍 從位 中納言 位中納言 位康保五平

予按はる者尔真范仁和延喜の頃此人ありといふ
 より信系を捕が比すべし六七十の頃よりいふ
 元彌等が天曆辛卯壺とて後撰集をなすべし
 と記松垣が事なりといふはさうさうありあつた
 ところのものなり大和物語は中々大貳と書し
 他は誤記なりといふものなりとすべし
 あるは松垣がよるは白河のあたり筑紫の白河

とよを眺ちやも白河といふ河ありはふも松垣の
めりよ河のふあをむ若原為長の十割抄は肥後國
の遊女松垣とありと若原清輔の袋雙子も松垣の
肥後のふれ地を後よ落魄なるものなり白河の
件のやよもあといふく大和地頭首書もたのふ
のせよ白河の肥後河蕪山より出たといふと載る
といふ白河のふ九品山蓮臺寺は松垣の石塔ありといふ

と肥後の白河のふもあといふくは松垣の
考へるべし

わも松垣のふりめは松垣の肥後は肥後よまら
白河のふもはといふは松垣のふりめは松垣の
肥後のふもはといふは松垣のふりめは松垣の
てまの松垣のふりめは松垣のふりめは松垣の
事りてやといふは松垣のふりめは松垣の

松垣のふりめは松垣のふりめは松垣の

よよのく〜府官が事あるにたゞめ辨ちの後
後よ地はよまら〜なり

わろ説は松垣は白拍子より茶曲ちまきのり〜なりと云傳よ
きと遊ちる白拍子い多御流の市字ちまのせんざいは源千載せんざいの
あとい共まはら衆しゅうたゞめ〜なりと源平盛衰記ちまに見く
説統弟よ、碓すい原げんを〜なりと志ちるなり
この説よ〜りても松垣が時代より百八十年後

此事なるや

何れ説はち宰府はかりは松垣志のりしてを免る
るよむがまの女〜ぬ〜りとも遊ちる松垣とハ
ちの拍子はしが名なり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

右ある人のりしめよまうせ事程を考へ謬傳地
改むる紙送海方誤むるべしといひ孫が
ちくハ後の君々人刑補の筆をくハつじし成
寶永四年九月日
蟠龍子書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



